

対 比

1. タマムシ



打吹公園や長谷寺周りのエノキの大木を見上げてみてください。運がよければ、何か勢いよく樹冠を飛び回っている虫に遭遇します。これが有名なタマムシです。タマムシの仲間はたくさんあり、一般的な総称としても使われるため、ヤマトタマムシと呼ぶこともあります。

幼虫は樹木の材を食べています。カミキリムシなどと同じ甲虫の仲間、成虫は夏に現れます。成虫はエノキなどの葉を食べるためにきているのです。捕獲するのは難しいことですが、寿命が1ヶ月くらいなので、死んだ個体を拾うことは多々あります。

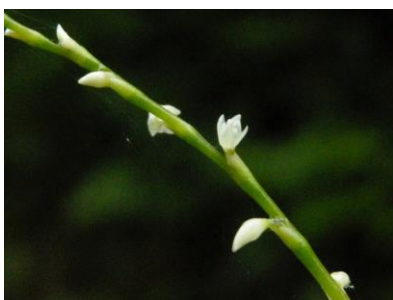
タマムシの虹のような赤や緑の金属光沢を持つ縦縞は、見る角度によって色が変わります。俗に玉虫色といわれ、どのようにでも解釈できるはっきりしないものの例えになるほどです。この色は死んでも変わりません。有名な法隆寺の国宝 玉虫厨子の装飾に用いられて、今なお色を失っていません。色素ではなく、構造色といわれる薄層を通る光の干渉によって見えているからです。虹やシャボン玉、水面の油膜で見える色と同じです。

ところで、縦横という表現は、生物の頭と尾や腹端を結ぶ正中軸に平行な方向を縦、直角に交わる方向を横とします。虫を水平に置いたときの横は縦なので、タマムシは縦縞と表現します。

タマムシはなぜこのような派手な目立つ色彩を持つようになったのでしょうか。生存に不利な形質は残らないはずですので、天敵となる鳥には嫌われるのでしょうか。マツに集まるウバタマムシは地味な色彩です。

2. ミズヒキ

祝い封筒に用いる紅白の水引のように、紅白の花を持つことから命名されています。枝分かれした茎の先に30~40cmばかりの細い穂を伸ばし、ポツリポツリと花がついています。紅白には見えません。下側から見上げてみましょう。今度は白ばかり見えます。上側3枚の花弁のようなものは赤く、下の1枚が白いのです。しかも、これは花弁ではなく萼片ですので、落下せず長い間ついています。観賞期間は長く、全部が白の個体も鎮霊神社付近には見られます。



個々の花と花の間は開いているため、穂が長くなります。花は元から順に開花していきますが、どの花が開花しているか分かりづらくなっています。目を近づけて見ると、萼片が開いているものがやっと分かるでしょう。受粉が終わればまた閉じてしまいます。

生育場所は藪の縁など湿り気の多いところ、葉は大きな広楕円形で、陰でもたくさんの光を受けるために役立っています。葉の中央に黒褐色の斑紋がありますが、生長するにつれて目立たなくなります。